



## 年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

この方のなされたことはすべて、すばらしい

「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにして下さる。」

(7・37) 周りにいる群衆の、イエスに向けた最大級の賛辞です。これ以上ないくらいにイエスを褒め称えましたが、褒めて褒め上げて、その人達はどうなったのでしょうか。

平戸地区の球技大会ですが、天気がねえ。私が説教を準備している時点で予報を見たところ、一日中雨予報でした。仮に雨が小降りでも、風が強くて体育館の競技以外は難しそうです。私はこの前、ナイターソフトで3打数3安打しましたので、今年の平戸地区球技大会だったら3打数3安打できると思っていたのですが、残念です。

残念と言えば、私の応援しているプロ野球のチームも、マジックが減っていて、もう減らないでほしいと祈りながら試合の様子を見守っています。チームが負けているのに、マジックが減るわけです。このままでは振替休日に広島経由五島福江行きで試合観戦した時、優勝争いの終わった試合観戦になりかねません。適当に勝ったり負けたりしているのですから、他チームはぜひマジックが減るのを阻止してもらいたいです。

さて福音朗読ですが、群衆がイエスを褒め称える声を聞いて、何を考えたのでしょうか。私は、「あなたたちは今はイエスを褒め称えているけれども、しばらくしたらイエスに『十字架につけろ』と言うのでしょうか」そんな事を考えています。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」この言葉が、イエスに対して最高の言葉ではなく、常に変わらない言葉であるべきです。

イエスが救い主ですと信じる人は、「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と言うのであれば、イエスが徴税人や罪人と食事をすることも、今にも石投げの刑に遭おうとしている罪深い女性をゆるしてあげること、最後に十字架に磔にされていのちをささげること、すばらしいと言える人でなければなりません。けれども集まっている群衆のどれだけの人が、罪人に手を差し伸べるイエスを、十字架に上るイエスを、「すばらしい」と言ってくれるのでしょうか。

同じ問いかけは、私たちにも向けられています。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」イエスを称えるこの言葉は、私たちの言葉でもあるはずですが、私たちがまた、見た目に華やかな場面ではすばらしいと言っても、目立たない働きや、理解に苦しむ姿や、私たちが受け入れるのが難しい答えを示された時、同じようにつぶやくのではないのでしょうか。

一切を横に置いて、「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と言い切る信仰を願いたいと思います。金曜日に数々の病人を訪ねました。一人は病院を転院していました。一人は病院スタッフがかかりきりでお世話をしていたため、訪ねるのを断念しました。聖体拝領が難しい

病状にある人もいました。そこまで訪ねていながら、手を差し出せずに帰っていくのは、本当に辛いものです。「なぜこうなるのでしょうか」と、納得できずに病室を去っていきます。こんな時でも、司祭は揺るぎない信仰に立って、「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてください。」と言えるようになりたいです。

よく考えると、司祭が病人を訪ねていくのは病人のそばまでで、病人の魂にまで訪ねてくださるのは他ならぬイエスです。ですから私は一喜一憂せず、「私はここまでしか病人に近づけなかったが、イエスは必ず慰めてくださる。この方のなされたことはすべて、すばらしい。」こう考えたいと思います。こうしたことの積み重ねが、揺るぎない信仰に結びつくのではないのでしょうか。

お一人お一人に当てはめてみましょう。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」イエスをこのように称えたいけれども、現実の生活はそれを許さないかもしれませぬ。苦しみがあり、悲しみがあり、思うようにいかないもどかしさがあります。こうした中で、「それでも私はあなたを称えます」このように返事をしましょう。

「私たちの信仰はすばらしい」とたやすく言えることばかりではありません。それでもイエスを称える。「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と称える。その積み重ねによって、私たちの目は開かれ、耳は聞こえるようになり、信仰は鋼のように鍛えられるのです。